



2021年度 国際言語文化研究所連続講座

# 「病」との接触 — 災厄を記憶する —

10月8日・15日・22日・29日(毎週金曜日) [17:00 ~ 19:00]

【開催方法】オンライン開催 ※Zoom ウェビナーにて開催いたします。スマートフォンでの  
ご視聴はアプリのダウンロードが必要となります。

参加無料  
手話通訳

第1回  
10月8日

## 「戦争が残した傷・病」

コーディネーター・司会：内藤 由直(立命館大学)  
発表1：栗山 雄佑(立命館大学) / 発表2：松田 英里(早稲田大学本庄高等学院)

第2回  
10月15日

## 「カナダの日本人移民社会における「病」—スペイン風邪・結核との闘い—」

コーディネーター：河原 典史(立命館大学)  
発表1：河原 典史(立命館大学) / 発表2：坂口 満宏(京都女子大学)  
コメンテーター・司会：志賀 恭子(同志社大学)

第3回  
10月22日

## 「災厄を伝える民うた・民がたり —震災・戦争・パンデミック—」

コーディネーター・司会：鶴野 祐介(立命館大学)  
発表1：鶴野 祐介(立命館大学) / 発表2：川島 秀一(元東北大学教授、日本民俗学会会長)  
昔語り：大平 悦子(語り部)

第4回  
10月29日

## 「原発禍からコロナ禍へ—連鎖するカタストロフィを考える—」

コーディネーター・司会：土肥 秀行(立命館大学)  
発表1：田口 卓臣(中央大学) / 発表2：ロベルト・テッロージ(立命館大学)  
コメンテーター：中村 隆之(早稲田大学)

【参加方法】当日、下記リンクまたはQRコードよりご参加いただけます。

※Zoomウェビナーにて開催いたします。スマートフォンでの視聴はアプリのダウンロードが必要となります。



# 病との接触 — 災厄を記憶する

病との接触に際して、私たちはいかに思考し得るか。生命の危機は、人々に何をもたらしたのか。かつての戦争や約100年前のスペイン風邪、さらには飢饉や原発事故によって生じた非日常的状况と往時の人々の生活を、コロナ禍の現在に引き寄せながら、今を生きる私たちの「生」を改めて考えてみたい。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的大流行は、今なお人類に猛威を振るい、社会を混乱に陥らせている。今年度の連続講座では、過去から継承された記憶を手掛かりにして、現在の混沌を抜け出す一縷の道を模索していく。

## 第1回 [10月8日] 戦争が残した傷・病

戦争は、人々に深刻な傷・病を与えた。その痛みは、今なお受傷者の心身を苛んでいる。本講座では、戦争による惨禍の記憶を、傷痍軍人の戦争体験記、並びに沖縄作家たちの文学表現から浮上させ、戦争が残した傷・病にいかに向き合うことができるかを考える。

発表1 眼前の〈トラウマ〉に向けて — 「戦後50年」の「沖縄」文学から

栗山 雄佑 (立命館大学)

発表2 「傷痍軍人」の体験記にみる戦争の傷痕

松田 英里 (早稲田大学本庄高等学院)

コーディネーター・司会 内藤 由直 (立命館大学)

## 第2回 [10月15日] カナダの日本人移民社会における「病」—スペイン風邪・結核との闘い

1918~20年にスペイン風邪、1932~1942年にはコレラが世界を襲った。2つの病魔はカナダ・バンクーバーにも来襲し、当時の日本人移民にも多くの罹患者がみられた。すでに2世も誕生していた日本人社会は、いかに病魔に立ち向かったのだろうか。日本語新聞をはじめとするさまざまな史料から、日本人社会の「病」への対応について考察する。

発表1 バンクーバーにおける日本人社会とスペイン風邪—日本語新聞『大陸日報』からの分析—

河原 典史 (立命館大学)

発表2 バンクーバーの日本人健康相談所と結核予防への取り組み (1932~1942年)

坂口 満宏 (京都女子大学)

コメンテーター・司会 志賀 恭子 (同志社大学) コーディネーター 河原 典史 (立命館大学)

## 第3回 [10月22日] 災厄を伝える民うた・民がたり—震災・戦争・パンデミック—

太古の昔より、様々な災厄に直面した時、人びと(民)はともに歌い語ることで、その理不尽な出来事を受け止め、乗り越え、さらにこれを他の社会や次の世代へと伝えようとしてきた。本講座では、このような民のうたやかたりの機能について、実演を交えながら考える。

発表1 戦争・飢饉・疫病を伝える子守唄・わらべうた

鶴野 祐介 (立命館大学)

発表2 災厄を伝える民がたり

川島 秀一 (元東北大学教授、日本民俗学会会長)

昔語り 災厄を伝える遠野の民がたり

大平 悦子 (語り部)

コーディネーター・司会 鶴野 祐介 (立命館大学)

## 第4回 [10月29日] 原発禍からコロナ禍へ—連鎖するカタストロフィを考える

原発禍からコロナ禍へ、いまやカタストロフィーはサイクル化し、災禍はわれわれの文明に内在するものにとらえざるをえなくなっている。この現実を前に、『脱原発の哲学』(田口)、『イタリアン・セオリーの現在』(テッロージ)、『野蠻の言説』(中村)の著者とともに思想を停滞から解き放ちたい。

発表1 〈人間〉を超え出づるものたちに関する二、三の注釈—核と疫病を手がかりとして

田口 卓臣 (中央大学)

発表2 パンデミックから災害まで：人類のリスクを哲学する

ロベルト・テッロージ (立命館大学)

コメンテーター 中村 隆之 (早稲田大学) コーディネーター・司会 土肥 秀行 (立命館大学)